

地域の河川からプラゴミを消したい！ ～インドネシアの伝統的粗放型エビ養殖地域 における住民たちの思いと実践～

特定非営利活動法人APLA 事務局長 野川 未央

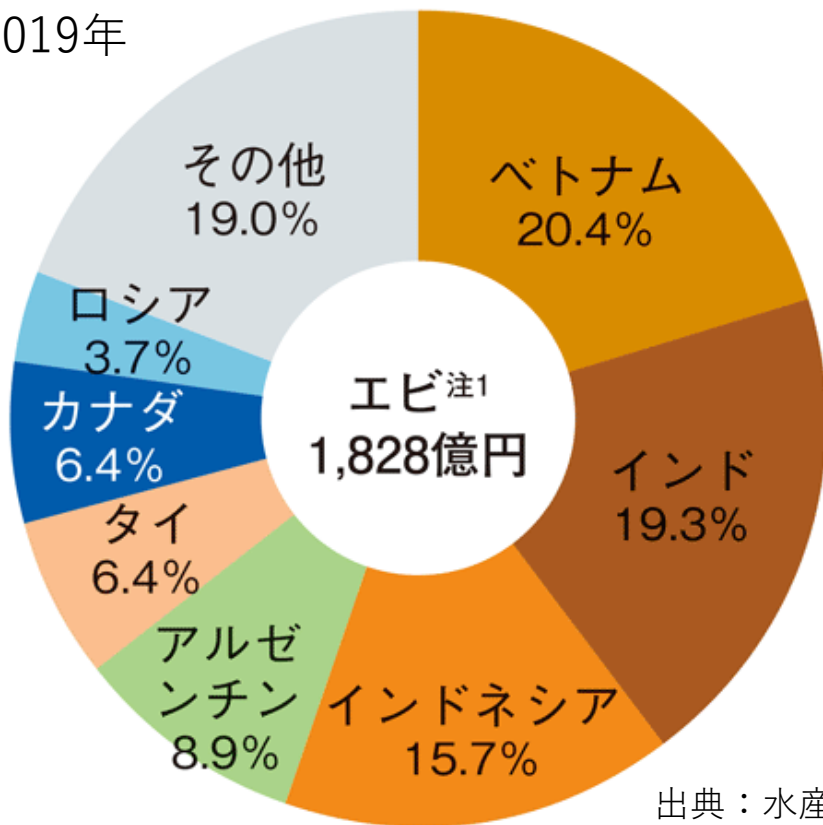


活動の背景①

- 活動の舞台はインドネシア共和国。人口2億7,300万人（2020年推定）を有する、人口では世界で4番目に大きな国です。
- 豊かな自然に恵まれた赤道直下の国ですが、近年は目ざましい経済発展、それに伴う都市化、人口増加により、様々な環境問題に直面しています。そのうちのひとつがゴミ問題です。
- インドネシアでは行政によるゴミ回収システムが発達していないこと、一般的にゴミ問題に対する住民の意識が低いことから、ゴミ投棄による環境問題が深刻化しています。

活動の背景②

2019年



日本が輸入するエビの
60%以上がアジアから
やってきます。

インドネシアはベトナム、
インドにつづき第3位。

出典：水産庁（財務省「貿易統計」もとづいて作成）

1980年代、ブラックタイガーの集約型養殖池が急速に拡大

- 東南アジアの沿岸部各地の開墾による養殖池の造成。
⇒ マングローブ林の伐採を加速化。
- 大量の人工飼料と抗生物質を投与。
⇒ 残渣を含んだ水が排出され、周辺の環境を汚染。
⇒ エビの安全性への疑問も残る。
- 養殖池では大量の水の入れ替えが必要。
⇒ 大量の水の汲み上げにより、周辺で地盤沈下が発生。



エビを食べないことを選ぶ？それとも…？

いまエビが危ない！

世界一のエビ産地 第三世界の危機はエビ好き日本のせい？

過密養殖は、
数々の問題を残す！

日本人は世界一のエビ好き民族！

エビの輸入大国 日本
その55%は海外産品

エビの輸入大国 日本
その55%は海外産品

■高級のブラッザイガー



パルシステム

海老が変わる。

インドネシアから
産地指定エビのテスト供給始まる。

海老が変わる！

エコ・シーリン 560円
エコ・シー 380円

海老大町 大町人

その海老はどこの？



ジャワ島東部の伝統的な養殖池との出会い



ハジ・アムナン氏

私のこの池は未来の子孫からの預かりもの。次の世代へ引き継いでいかなくてはならない。

集約型の養殖でこの池を破壊したら、未来に対して申し訳が立たない。

1992年、オルター・トレード・ジャパン（ATJ）が「エコシュリンプ」の輸入を開始



[バランゴンバナナ](#) [マスコパド糖](#) [エコシュリンプ](#) [コーヒー](#) [オリーブオイル](#) [カカオ](#) [ゲランドの塩](#)



エコシュリンプ

「土と水は子孫からの預かりもの。汚染したり破壊してはならないのです！」インドネシアで、そんな考えをもつエビの生産者に会いました。エコシュリンプは、地域の自然の力と人びとの知恵をうまく融合させた粗放養殖によって、いきいきと育つエビです。

[もっと読む](#)





現在のエコシュリンプ産地

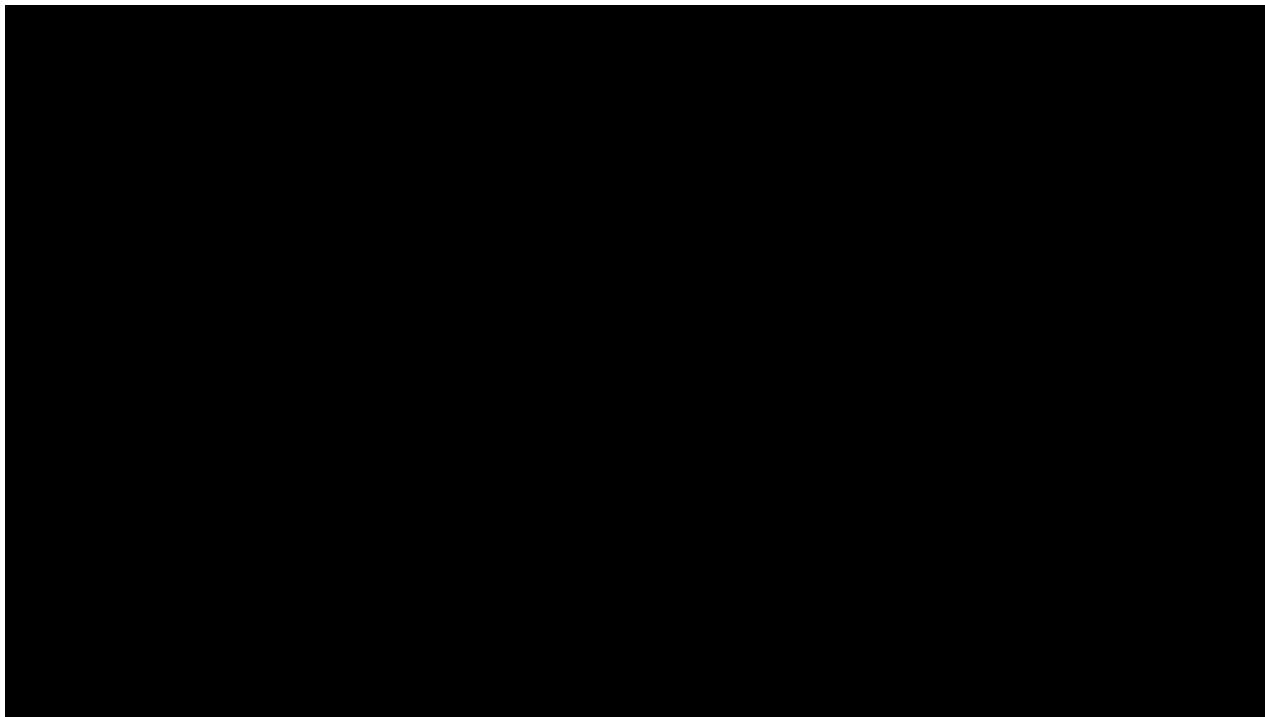
東ジャワ州
(シドアルジョ、
グレシック)

2004年から
南スラウェシ州
(ピンラン)

1400名の生産者
総面積8600ha



産地の様子を少しだけご紹介



粗放養殖は自然の仕組みを利用した 養殖方法で、良質な水・土壌が不可欠です。

- 2012年、シドアルジョの粗放エビ養殖の生産者と冷凍エビ工場を運営するオルター・トレード・インドネシア社（ATINA）のスタッフが中心となって、KOIN（インドネシア環境保全）というNGOを立ち上げました。
- KOINでは、2015年から2017年まで、りそなアジア・オセアニア財団の助成を受けて、『エビ養殖地河川流域住民による環境整備活動』に取り組みました。



合成洗剤ではなく石けんを！

ATINA社で石けんを製造し、

- ・ユニフォームの洗濯
- ・製造ラインの洗浄
- ・入室時の手洗いなど、
工場は合成洗剤不使用。



地域への普及活動も進めています。

マングローブの苗を継続的に植樹



養殖池近隣の村の ゴミ問題にもアプローチ





3年間に3村で合計約1300個の
ゴミ箱を設置。毎日ゴミの回
収がおこなわれています。

成果① 地域住民・行政の自主的な活動

村の行政と一緒にプログラムを継続していくにつれて、実際に効果を実感した住民も熱心になっていきました。助成金からのオペレーションコストの拠出期間（1年～2年）が終了した時点で、**どの村でも住民グループが自分たちで回収活動を担い、現在まで活動が継続されています。**活動資金については、クドゥン・ペル村とパルミサン村では1世帯あたり2万ルピア（約160円）の**分担金を月々支払う**という形、クボグヤン村では、**村の予算で活動が継続**されています。運営コストだけではなく、村が回収したゴミの一時置き場や小屋、焼却炉を準備したりという**行政の関与にもつながっています。**

成果② 他地域への広がり

成功の影響はシドアルジョだけにとどまりませんでした。ATINAが日本向けのエコシュリンプを買付けているもう一つの地域、南スラウェシ州ピンラン県のエビ生産者も**シドアルジョの事例を学び、自分たちの地域が抱えるゴミ問題を同様に解決していきたいという思い**を強くしました。

⇒ATINAおよびKOINでは、それまでの経験を元にピンラン県のエビ生産者による地域環境整備活動を全面的にサポートすることを決定し、2020年9月、エビ生産者や地元出身の学生たちが構成員となって「KONTINU (Komunitas Pemerhati Udang Windu Indonesia)」というNGOが設立された。

南スラウェシ州 ピンラン県



KONTINU代表の
Syarifuddin氏
(エビ生産者)

コロナ禍にも負けずNGO設立・活動開始



家庭に配布するゴミ箱340個を制作、 ランリサン村（1005世帯）の通りに設置



3輪自動車を改造したゴミ回収車で 6月からゴミ回収をスタート！



回収したゴミの **7割** がプラスチックなどの燃えないゴミ。

プラスチック、ビン、缶などは分別して回収業者に売却。

有機ゴミからは液肥をつくって、住民に配布している。



地域住民と一緒に 海岸の清掃ボランティア活動も



県行政への働きかけも



回収活動開始から5カ月で…

- 地域住民からも非常に良い反応「村がきれいになった」
- 村長から日本の支援に対して感謝の声
- 県からモデルケースとして認定された

今後の活動方針

- ランリサン郡ランリサン村でのゴミ回収は継続
- 新たにマートルショソンペ郡マットムボン村で住民の組織化とゴミ回収を開始
- 回収したプラスチックゴミのプレス機械を入手したい



ご静聴ありがとうございました。